

華岳山恩林寺発行



令和6年3月号

# 顛飽袋 749



写真：高山市仏教会はなまつり（高山別院にて）



お寺へ行こう 和尚さんと友だちになろう

中山かんのん  華岳山 恩林寺

中山中学校下

☎506-0052 岐阜県高山市下岡本町2779

✉kagakuzan@onrinji.com ☎(0577)34-1245



<https://onrinji.com/>

## お彼岸の話

私たちがお寺から頂く法要の案内には三仏会さんぶつえというものがあります。

◆二月十五日 涅槃会ねはんえ

お釈迦様が亡くなった日

◆四月八日 降誕会ごうたんえ

お釈迦様が誕生された日

◆十二月八日 成道会じょうどうえ

お釈迦様が悟られた日

この他に毎年、春と秋に行われる

彼岸会、宗祖様を偲おんきぶ遠忌おんきなどがあります。

彼岸は春分と秋分の

日を中日として前後三日、それぞれ

の一週間をお彼岸と申し、いわ

ば仏教週間であります。この間、お

寺ではお彼岸法要が行われ、聞法

に出かけたり、ご先祖様を偲おんきび、

お墓参りをいたします。この仏教週

間はお盆とは異なり暦には載つて

おりません。お彼岸は農耕民族で

ある日本にしか

習慣はありません。

遠く聖徳太子の

時代から伝えられてきたといわれ

ています。観無量寿経というお経の

中に「日想観」という考えがあり、

善導大師の教えに「その日、正東よ



り出て真西に没す。弥陀の国土は

日の没する処かにあり。」とありま

す。これを『観想かんそう』と言ひ、真西に

ある太陽を感じ、そしてかの世界

を想う。これが春秋の彼岸の由来

とされています。

お彼岸の仏様への

お供えは春は

ぼたもち、秋は

おはぎとなります。

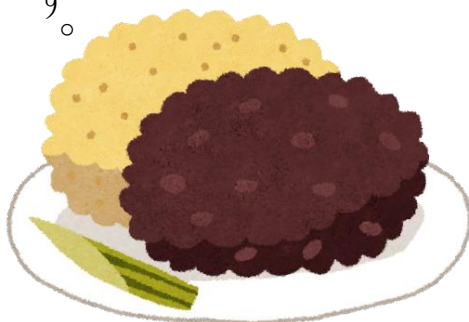
ぼたもちは牡丹の花、おはぎは萩の

花をイメージしています。

昔は、餅米、砂糖、小豆は貴重な

物でこうしたもので作ったものを

ご先祖様を思い出しお供えし、



また、家族みんなでおすそ分けする。これこそ彼岸の教えである布施の実践と言えるでしょう。

### 恩林寺涅槃会彼岸会法要

例年の通り、お馴染みの和尚様をお迎えして涅槃会、彼岸会を勤めます。皆様ぜひお出かけください。昨年お越し頂いた方々には改めてご案内いたします。

●日時：三月十七日午前十時半

●会場：恩林寺本堂

●法話：新堂 小森鳳雅

### 和尚の昭和岡本を語る

私たちが育った戦後は食べる物もなくみんなが質素な生活をして

いました。学校帰りに田んぼの畔に生えた「スイモンサ」を食べたり、いつたんだらけ「イタドリ」の茎を食べたりしました。水浴びはすのりがわ苔川の雁川原さんの前あたりで泳いだり、時には隣村の冬頭の四十九院橋近くで泳いだりしました。冬頭の川近くには岡本河童が現れ、キヌウリ畑が被害にあいました。当時の



小瀬長十郎さん宅の前には、幅二尺ほどの川が流れており、シジミが採れました。学校帰りに採って味噌汁に入れてもらったりしました。そういえば大志多さんの裏に

大野さんという家がありその横の川では青貝も生息、採れた時は大喜びで持ち帰り自慢しました。私達の学校は北小学校で、建物は戦前のもので台風が来たりして倒れる心配があったのか、電柱よりもつと太い突支棒つつかいぼうがしてありました。西小学校の生徒に「わーい。ゴサ（田舎者）学校。つこ18本。」などと馬鹿にされました。（『つこ』とは突支棒のこと。）

今、思い出しても悔しい…。

### 華岳山 恩林寺

住職 古田 正彦

新堂 小森 鳳雅



小僧さんの



## 雲水日誌

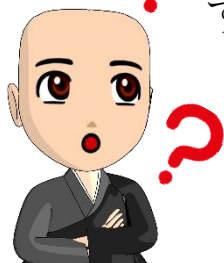
### 【第二章 十二節】 退堂

入堂してから一年が経過しました。私は復学や就職活動のために退堂することとなります。入堂した時と同様に、退堂するにも準備が必要となります。中でも、師匠からの手紙を頂くことが重要となります。何故かという、雲水が個人で退堂のお願いをすると、意志が弱いただけだと思われてしまうからです。その手紙を禅堂知客ぜんどうし（僧堂師匠）に渡した時、こう言われました。

「あなたは僧堂を辞めるのではない。ただ一度帰院するだけだ。用事が終わったら、いつでも帰山しなさい（本山に戻っておいで）。」

そして難しい禅問答が出題されました。なかなか答えられず、現在も苦戦しています。

この宿題はいつ終わるのでしょう。



また、後輩への引継ぎも大変です。お経に関することや、本山行事の飾りつけ、檀家さん宅の把握など、全てを指導します。

自身が教える立場となり、改めて教える難しさを感じます。

そしてこのやんちゃな小僧を教導いた禅堂知客の有難みを感じました。

令和四年四月三日、脚絆きゃはんを付け、笠を被り、入堂時と同じ格好で僧堂の前に立ちました。

外での自由な生活に戻りたいと願っていたのに：こんな過酷な環境は嫌だと思っていたはずだったのに：。先輩に怒られて同夏と励ましあい、泣いて笑って過ごしてきた生活ではなくなると思うと寂しく感じました。知識や経験を頂いて、新たな修行のために僧堂を後にしました。